

## 『恒石重嗣年譜』解説

恒石重嗣(つねいし・しげつぐ)は1909年高知県生まれ、陸士は瀬島龍三と同じ44期。陸大を卒業し41年11月から45年6月まで参謀本部第2部第8課で宣伝を担当。戦後「東京ローズ」裁判の証人としてマスコミの話題となる。88年、5千人の会員を擁する高知県軍恩連盟会長に就任、96年逝去。本書は彼の誕生から死亡までの出来事を日付順に記述した。彼の第一の功績は、諸外国に比べ見劣りした日本の海外放送の改善である。日本は対外宣伝で満州事変後中国との競争に敗れ、その反省から40年12月情報局の開設に至るが、問題点は解決されなかった。42年8月、日米交換船で帰国し第8課長となった西義章大佐は、海外で聴いた日本の「ラジオ・トウキョウ」を、「生硬だ」と酷評、恒石はその改善を放送経験のある捕虜の活用を求める。彼らを日本放送協会で技術指導に当たらせ、問題点の指摘を求めた。そして43年3月、米軍兵士の戦意低下を狙う「ゼロ・アワー」を開始させる。女性を含む日系二世と捕虜によるこの新番組はガダルカナル周辺の敵軍兵士に多数の聴取者を獲得。同年12月には米本国に向けた「日の丸アワー」を始める。なお、本書執筆に当っては彼の著書『心理作戦の回想』を基に、新聞の取材、『偕行』など雑誌への寄稿に加え、関係者の証言を収録した。